

樋渡啓祐 プロフィール

樋渡社中代表、前武雄市長（佐賀県）。1969年武雄市生まれ。東京大学経済学部卒業後、総務庁（現総務省）に入庁。大阪府高槻市市長公室長への出向などを経たのち同省退職。2006年、武雄市長選挙に出馬し、当時全国最年少36歳で市長に就任。ドラマ「佐賀のがばいばあちゃん」の誘致、市民病院の民間移譲などを手掛け、2013年4月にはTSUTAYAを運営するカルチャー・コンビニエンス・クラブ（CCC）が指定管理者となった武雄図書館をリニューアルオープンさせた。365日稼働、スターバックスコーヒーも入った図書館は年間来館者数約100万人、今や街づくりのエンジンとなっている。現在、地方創生に関する活動をサポートする「樋渡社中」代表を務めるかたわら、地域経済活性化支援機構（REVIC）社外取締役関西大学大学院客員教授などを務める。

山田 そういった意味では、「ふるさと納税」も重要な戦略のひとつだと思います。今、隣の都市では193億円と全国1位の実績を上げています。実は霧島市も、素材やストーリーのポテンシャルは負けていない。けれど、それをどうプロデュースして、磨き上げて、全国に届けていくか。そこが勝

樋渡 非常に本質的な視点だと思います。地方の課題というのは、何も「人口が減ること」そのものではないんですよ。大切なのは、地域にお金が循環しているか、市民の暮らしが豊かになっているか。つまり、所得、です。観光が盛り上がることで、飲食業や小売業の収益が上がり、それが従業員の給料に反映されていく。これはまさに「関係人口を増やす」ことがもたらす波及効果ですよ。

それがこれからの時代の成功モデルじゃないかと。

山田 ありがとうございます。私はこれから、「稼ぐまち」「選ばれるまち」という2つのキーワードを軸に、霧島市を戦略的にデザインしていきたいと思っています。そしてその先にあるのが、「市民一人ひとりの所得を増やす」という明確なゴール。自治体経営という言葉が本質的な意味を持つ時代が、ようやく来たと感じています。

樋渡 都城の成功は、自治体の本気度の現れです。ふるさと納税の分野では、アイデアも大切だけど、それ以上に「やるかやらないか」。必要であれば、私から霧島市に合った人材をご紹介することもできます。何度か霧島を訪れましたが、売れる素材、価値のある文化、本当にたくさん眠っていますよ。きちんとブランディングしていけば、都城に並ぶ可能性は十分あります。

負の分かれ目ですよ。

「稼ぐまち」×「選ばれるまち」

——これからの地方自治を語る

山田 今日はお時間いただきありがとうございます。私自身、これからの霧島市の未来を描いていくうえで、どうしても樋渡さんとじっくりお話ししたいと思っていました。最初に伺いたのですが、人口減少が加速する今の日本で、地方が生き残っていくためには、どんな視点が必要だとお考えですか？

樋渡 こちらこそありがとうございます。今の時代、やっぱり「選ばれる都市」になることが最も重要だと思っています。昔は、「どれだけ工場を誘致できるか」とか、「いかに人を集めるか」ばかりが議論されていましたが、今は価値観が変わってきました。今は2拠点居住、やリモートワーク、の普及もあり、人が「自分の意思で暮らす場所」を選ぶ時代になりました。その選択肢に入るためには、単に稼げるだけでは不十分なんです。

山田 私まさにそこを強く感じています。12年前、私は「これからの自治体は、稼ぐまち、を目指すべきだ」と主張してきました。当時は、行政が稼ぐなんておかしい、と言われたものですが、最近はその考え方も市民にだいぶ浸透してきましたよね。ただ、これからはそれに加えて「選ばれるまち」をどう実現していくか。両輪で考えていく必要があると感じています。

樋渡 おっしゃる通り。たとえば私が市長を務めていた武雄市では、図書館や病院など「暮らしの質」に力を入れてきました。結果的に、住民票は他にあっても武雄に拠点を持ちたいという人が増えて、2拠点目を選ばれるようになった。これは単に施設があるというだけではなく、「人の魅力」「地域の物語」「暮らしやすさ」があつてこそなんです。霧島市にも、そうしたポテンシャルが十分にあってと思いますよ。

山田 実際に、霧島市には温泉・自然・歴史・文化、そして空港まである。インフラだけで見れば、非常に恵まれた地域です。ただ、それらを、どう魅せていくか、が、これからの自治体経営の腕の見せ所ですよ。私は今、「人口増」よりも「関係人口の最大化」に力を入れるべきだと考えています。霧島市に通ってくれる人、買ってくれる人、応援してくれる人を増やす。その結果として、市民の一人あたりの所得をどう引き上げていくか。

樋渡 そのビジョンに共感します。霧島市には、全国の地方都市の課題を突破する力があると思います。「こんな地方があるんだ」「こういう形で成長できるんだ」と他の自治体が驚くような先進事例を、ぜひ霧島からつくってください。私も引き続き、全力で応援させていただきます。

山田 本当にありがとうございます。霧島を、日本の地方創生のロールモデルに——その挑戦に、これからも全力で取り組んでまいります。



山田りゅうじ
RYUJI YAMADA



樋渡啓祐
KEISUKE HIWATASHI

